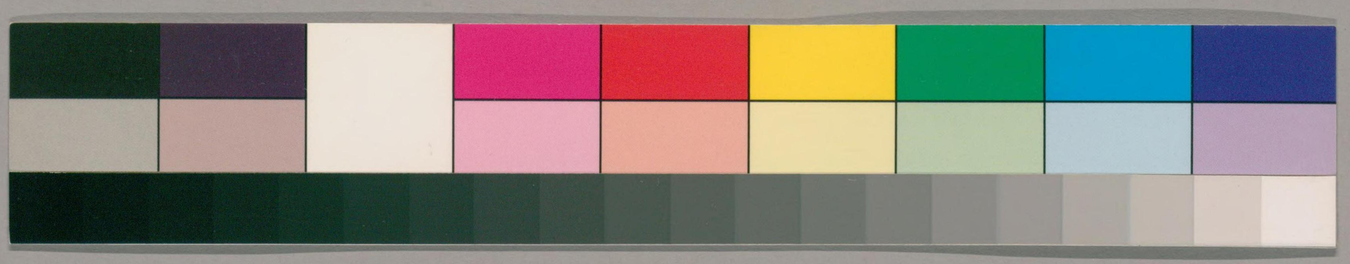


足薪翁百話

中

859
3
83

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83

859-83

駒下駄　並下駄名称と一丁

おろせ　五丁
窓銭　七丁
鎮鋤屋金奥　九丁
加賀節　十二丁
き政ぶつる　廿二丁

竹の や竹

罷傾　紫垣　廿五丁
獨狂言　廿七丁
盃を置へきつむ　三十丁
日傘　三十二丁

くりもの

八十翁　琴唄　一丁
蛇ゝ助　一丁
四ッ竹　十一丁
丹前勝山　十七丁
煙草の付ゝ　廿三丁
角兵衛獅子　廿四丁
尼が紅粉　廿六丁
孔雀太夫　廿九丁
十筋右ぢの牙絵高三十丁
玉ゝ返　三十四丁

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

煎餅屋 ㊀ちゃくんぐん 辛六丁
奴詞 四十三丁
籠屋着版 四十七丁
繪櫃 四十八丁
長者教 五十丁
幽禪扇 五十四丁
鯨帶 五十八丁

京江戸順礼 三十九丁
兵庫鬚 鴻田 四十五丁
鯨袖口 つじのもの事 四十九丁
酒中花 五十三丁
安河漏 市守長者 辛六丁

馬下駄

馬下駄ハ今以駒下駄の如く正徳比まで種この冊子ハ見えずこれ是ハ原庭下駄より出て昔ハ他所へゆきし物也てハなるべからぞ

砂金袋 明暦三年印本 大名のぐるみ小馬下駄の足拵 善種

早梅集 万治三年 梅盛撰 兩ヶりんぐと彩色ありて加賀の足拵の匂ひ

懷子 万治三年 重頼撰 問ことをばを長廬路(ロジ)の内 直重

落花集 寛文十年 以仙撰 庭の雪行馬下駄のことをよみて 重供

今様姿 寛文十年印本 重頼撰 馬下駄が五月の雨の足拵 重行

馬下駄百韻 延宝四年 常矩獨吟 馬下駄もひつるむ姫路の曙 以仙
馬下駄の詞や雪の道ゆき 一三
馬下駄ひけどもなほらぞ厚氷

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

俳諧三部抄　惟中撰　延宝五年

馬下駄ハ[illegible]とすきまあれ、雪の庭　子春

馬下駄で海を見すや五月雨　不琢

向の岡　延宝八年　不卜撰

焼印をもるをとそ

馬下駄やむら〳〵南鐐の雨　不卜

西鶴後太平救　延宝八年　吟

三尾の谷の峯て通ふ雪の白　寸松

後双六　延宝九年　清風撰

適大〳〵馬下駄の裏　西雀

寛文六七年の頃刊行か〳〵　蠅打　追加ホ「虎ばけもるものの五月雨」とふ

一雫ゟを負怨が雑ゐる河ホ「俗語ニ蔭座（ゲ）とも物ハ昔より有ル虎きれと

尚時きれとも古風の物ゝ　豹の爪とふぐろを今ハ馬げさとふい毋と古老の

すきれ有り虎げさといふ」とあるのれば豹の爪　馬下駄の古き名

なるべしさまでふるきさましてハ未見。豹の爪を馬下駄とふへ又昔ものゝ豹の下駄とふもいふなるべんと豹の爪の名ハ却て古き冊子ゆへハ見へ

俳諧玉手箱　延宝七年印本　豹の爪や二つ屋の名ぶく庭の雪　泰徳

分外集　艶士撰　序ニ元禄十五年巻中ニ宝永トふ句有ル

ひやし売ハ駒の爪あり牡丹畑　雪凍　庭下駄の音を柏子木よとふ句有

俳諧うく〳〵森　宝永年間　不角撰

平袴から将棊講庭の下駄まて　駒の爪　柏葉

将棊とふよう詰ゐ爪をかよをそふるき名をとしるべし又駒下駄の名ハ天和中より見へそう

俳諧題林一句　天和三年　調和撰　庭芝ゟ駒下駄いさめつゝし将　笑蛙

曽古の花　元禄十四年支考撰　竹のタ日のひる長縁　北枝

駒下駄の音を訳けば小姓衆　浪花

今北越ニ駒の爪牛の爪とふ本版ありと雪譜ホ

朱下駄一螺中をまるく「奇異雑談」ニあり

塗木履　塗足駄

毛吹草　寛永十五年　重頼　諸国名産部　和泉の条、「中濱の塗木履」とあり　堺鑑　天和三年著　「塗木履　女の著る履（くつ）あり　諸国ゟ多」といへる当津今市町の木履を吉とせ」とあるの見え

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

南無俳諧　宝曲年合仏撰

眠るが如くつひに往生　許丹
好き本意そのそこ忘れ物哉　貫仙

柳下駄

智恵袋　寛文末祐政撰

春風よ鼻緒もうやゝ柳ちく　常風

廣小路　延宝六年不卜撰

誓ひの唐網さゝろつゝ
古下駄の柳ハ菩薩と拝まれて言水

向の岡　延宝八年不卜撰

春雨や一世の恩ゐる柳下駄　凡老
時うれ花ハうれない柳下駄　立些

坂東太郎　延宝七年少九撰

道更迄の朽木の柳をお緒もの　九石

蛇と鮓　延宝七年言水撰

柳下駄弄る玉ぬく鼻緒哉　調和

後双六　延宝九年清凡撰

掃溜や朽木の柳下駄　露宿

さう昔ハ泉州みそおろくつくり物あるべし　一代男　天和二年著　一の巻中居女のるをいふ条ふ「そこ
くまで塗下駄をとまる所迄」又六巻大坂新町の遊女の事をいふ条ふ「内芙女房
ぞもあれ〜がるどの暇乞塗下駄のおと静よさうけからさもまてふる雪神をいと
なく大せうなる道中」

冨士石　延宝七年江戸住調和撰　鹿の声刷毛や物さ〜塗足駄　調和

句意を考るとけや物さ〜ゐり足駄と言なるべし
延宝六年江戸歌言「誠旦帳」全琴が芽三の句ふ「そけや物さ〜梅士のおび声
をふるふて」と詞のふてとし「ゐせて考べし」それを足駄ふて
鹿笛をつくる古事よりおひよせその吟あるべし

一時随筆　天和三年印本惟中著　妻の追善
つひの行雪の笠踏や岩ゐり水屐　棠道

入船　元禄年号幸佐撰　一時雨このそれ野良のぬり水屐　惟中

隠蓑　延宝五年刻仮船撰　いざとて鹿の裘(アシダ)ん塗履　信徳

浮世の北　元禄九年可吟撰　門のるき家ハ窓のうつくしきり　黙不
好き水屐より浮名くらん　路半

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

大井川集　延宝二維舟撰
肝拭五吟　延宝三年の作

嵐のかるくなるは夏桐の花　之因
佐野のとうりよ行水の客　似春
宿こへば三輪も杉下駄簀縁　宗因
うつろふ硯屏の山ちるくそびへ　惟中
杉けぶりの通ひ路ひろく　仝

俳諧破顔正返咲　延宝八年

桐の下駄

六日飛脚　延宝七年印本

雨露のそそぎ殘りて其人を　正察
桐の木蔭やあやめの道　遠舟
公家よ宿らせ竹の中こそ　芭蕉
月曇る雪の夜桐の下踏きけて　叩端
行さきの空よ納る光り物　詞夕
さてこそよまし桐の本の下踏　仝

熟田歌仙　貞享年

大樽　元禄八年正武撰

一代男二之巻　蓮葉女の事をしめす条よ「かちん染の布子嶋縞子の二つ別左りの方ふ結び赤帯ぶれて桐の下駄をはきてそこ」

竹下駄

うそ寒　撰者荷兮　前句男色ども等を割せる竹の下駄　蜑角

数寄屋下駄

糸瓜草　寛文元年甘撰　すまやげふとんをもやす夜の雲　一雲
　　五田の句

雪路下駄

蕪菁蔓

炉路霞の研小間ヶ石落の苑　無倫

草履下駄

江戸八百韵　延宝六年　一日も廻り長き一夜の春　如流

山行川　下り草履下駄の事　一説也　一夜も廻り長き一夜の春　如流
　　此句霞もあり下駄もありとよめる考へべし

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

おろせ

上方ふて駕籠舁く者をおろせとふ或人の曰むかし駕籠舁く者がおもくだおろせとふ歌をうくひてかきそうり」が中昔よう歌をぞうるぞうとうけ声ふそうよりおろせとふりなりとぞ寛文年間ふ刊行せ一狂独吟集」ふ

若狭　禁廐への道ふて連も一体く　安静

附句　おもくだおろせおろそだらく　同

此句ハ駕籠とふ事なれどもかくれど是とりさき明暦年間印本「野良虫」の序ふ「野良虫とふ者ハ年の程十五六の人の大きさだありふて手足口鼻眼をそなへ既ふ黒き既ふをかつぎて極園糸山男山向うへあめぐりて人のきんちゃくを狙らうとふそれ四種川原のかぶきふの幸ふて侍(サムラフ)ぬかとふべ大ふを打て為ひてされバそよそのかぶきふとふ者去年今年秋中さびとりて中年のゆうだ〜のころ〜眼ふくらされて芝居狂れバ東山ふと

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

もゐひ　なんぐ来ありふのせらまて　さい〳〵。おろせ〳〵
とうとせて考れバそのをのやうふありもそるさまの引書のこんいでも考ゆこゝろざれど
まづんをそふふ云のせておきつるなり

もなき童謡なるべし

三巻ノ報記四ノ八 〔笑径記〕「実方中将のあらち此野辺の末にまゆとかしまりすびきし かくふりけなきぬなくは
何事をとそれんなれその後はそゐまで年きと あづめらん あらちの野辺をみて過き」

あらぶせんの地蔵といふてそのかたへまさぶらひと ひろるとみえたり 〔東海道名所記〕にたけ地蔵
の首をいのて地蔵のさつ排逝をうしなひくびをきられてくだせんだうりへのとりたまふ之
あらぶせんは位牌所山とうきて地蔵菩薩の浄土なり
碧琳音義ニ阿伽帝耶山梵語山名也或訳為騾林山十宝山之一山也云々

窓銭

窓銭のうき世をよそに雪見かな　其角

此句〔焦尾琴〕又〔五元集〕にも見えたり 窓銭ハ宿銭の誤りなるべしと注釈せし人あれど焦尾琴ハ其角が自筆し五元集ハ其角が自ら書おろし銭すきうつしにして刊行なりし書にて一字も文字にて窓銭とあれバ写誤ともいひがたし 按ニ窓銭ハ窓運上の事なり今いふ小間割の類にて窓一つにつき何程といふ運上銭をいだすを窓掛といふ也 此事江戸にハなし されバかく雑有所に住ゆゑ窓掛といふさまのところへ窓を明ヶ雪を心よく見るもの有るを浮世がましとせしといふ句意なり 〔諸家大秘録〕前集十三巻 松平越中守所替野村増右衛門私欲のことをいふ條に「野村ハいよく主人の氣に入りて千石の分限となり其の後に計らひ主人借金返済の為なりとて 某名領内の松原へ松茸をうきに来る者に一人前六銭宛いださせ此金過半私欲とほし

又此外窓銭或ハ婚礼又ハ種この義ふ銭を取ること」を窓銭の証とす(び)

百姓盛衰記 正徳二年印本 三巻(ハ丁カモシテ) 梅桃柿物ゝて樹木つゞもさせる柵まで帳ふ記一本もきらせも皆お為ふ年貢をいひ有百姓をぬれまぬぐひいたる程出るのと氣をつけて井戸よりまで年貢とられるぶみの南清ふ国ぶひとつ吟るを是ふ苛とりつのげんとなれば志ゝ(ふ)ぶふまぎゃさんとゝゞふまでゝ三拝出せとゝゝ元旅よめいりまをうむまでの運上をとられる

蛇ゝ助

田中常矩獨吟 二百韵 蛇ゝ助 馬下踏二百韵と(り)書目錄ふハ蛇ゝ助五百韵とゝゝり(ふ)ぶ名ゝ

延寶五年二月獨吟巻ノ句

蛇ゝすけがうゝゝ元ゝ撞や花の暮

許六が 歴代滑稽傳 ふ名組け句をあつてより蛇ゝ助ハ今ふ底ぬけ上戸のおとこ(り)を載(り)蛇ゝ助ハ今ふ底ぬけ上戸のおとこ(り)

栗まの院ま「鬼と碎まし坊主も栗ふ節分の大豆(マヽ)を喰で宛ふ男

も肉損の葉ぜんさくま妻の老ふを「春ぬぞ」とつゞふまでゝ

花ゝ娘ものゝ坊ゝざるふ毎くも日のくゝとゝゝ

俳諧隠蓑 萩田似空撰 三月 音の句ふ

蛇ゝすけふゝゝる 紫(ゾヾ)桃の酒 自休

元旦の句も(ハ)れハ延宝の頃より当ひ一興多ゝるべし 東陽ゝ今ゝ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　　ガラス使用

物種集 延宝六西鶴撰

雪ふりつもりて消る地の皇
大坂の座ぬくまりそふく風 三冒

天王寺名所 俳諧独吟桜 貞享二年 豊流撰

蛇乃女こそ執心のこりて花ふる池 下也

俳諧とらみあ 元禄年号 季杉撰

土蜜から馬の舎る笛敲 行遊
蛇ら助撲て饅頭の番 李梅

鎮鋤屋の金魚 並木ふ傳
金魚の狂言

延宝五年印本 江戸雀 等をよんべ下谷池之端仲町とふ所ハ古ふる町どころ
今の如く家居さしつゞきたる所ハいつらぞ 柳未屋などハ有しさまなり 元禄二年印本 人倫訓蒙図彙
四の奥ふ「柳本を江戸下谷本々麻布ふ何」と注したるハ此ころをさしてふる
よぶ物ゝ初めなるべし 貞享四年印本 江戸總鹿子 六の奥ふ「金魚屋下谷池之端
ふんちう屋重左ヱ門」元禄二年の印本 隠庵 ふんちう屋又西鶴ふ渡後元禄二年ふ刊行せ
ほ ふ六七の巻ふ有
西鶴置土産 三の奥上野の桜ふらぐ〳〵ふ雑ゝ「黒門より池のそこをあるむふ志ゑう
や市をうつとてかんもあり 金魚銀魚を壱ツ宛水清く浮藻をくれあねぐりて三ツ尾
鯉の照うを金子五匁七匁ふ買ひてゆくもあり」 又遠ふ在ふ行ハ
西鶴ふ有 再板ふ貞享江戸鹿子ふハ池きせる
又市をうとひらふも有 下谷池之端ふんちう 市をうとふ有 因ふて志ゑう

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

くまもりの事をもつぱらとす
是等證とすべし　又一柿軒君下が撰し
俳諧向之岡　延宝八年印本　納涼　影涼し　金魚
かるるもわれば延宝の比より名ごろき金魚ぶ
岡云　一柿軒岡村不卜ハ俗称　鼻をつとひ赤潟門人にて江戸の人と　貞享
單總慶よ　ハ舟町とかりこれ緑二年の　德慶よ　ハ伊勢町とかり　涼涼が　綾錦　ハ
堀江町とかり　是等ハ諸家の所元さて撰集よ　他国の名をまぐさるなふ　江戸
廣小路　延宝とあつく此　向ふ　ハ廣小路の称呼集あり又是より後　つぎつぎ　貞享
をそくみえ元禄四年四月九日奉るの琴風が　瓦作　ハそえより墓ハ平河山法
恩寺ふかり
再案右ふり用せ　置土產　の月次よ　「金魚が狂言も水中を尾をふり鰐を動しまくふ寂寞をいふ」とかのあり此
狂言とハ金魚ぶ水中を尾をふり鰐を動しまくふ寂寞をいふあり

今菊を作る者其菓の狂咲して花形の変ずるを蒔ぶ
印本　好色盛衰記　貞享五改元禄元　三の巻よ「又の日ハ金魚を生簀ふ
ながら尾もつひ水ふきりてそと」又
新續大筏集　万治二年季吟撰　寛文七年印本
をそれるや　狂言金魚　秋の水　雲滴
万治ふ撰し俳諧のふふをそれバ古くより
題林一句　天和二年調和撰
狡金魚　水多山の　稲妻や　調幸子
ぶち金魚のふさふえそうそめ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

四ッ竹

貞享四年ふ刊行せし西鶴が[男色大鑑]四の巻ふ「兼應元年秋の夜の曇影をうしなひ物のさびしきもよふしあるまゝ新宇の南なりてふ宿の裡ハ笠をふかせられぬるゆ更て御なごきもかそりぬ其頃長崎より一平次といへる男きうて四ッ竹をりをを初めて手指ず犬うつ童まで世ふ是をなをらーそ」又元祿二年印本[人倫訓蒙圖彙]七の巻ふ「四ッ竹　長崎一平次といふ者ふて始め有得なる者ふて諸国の歌舞妓(ウタヒ)ふ芸者ハ身をうまもなく笠の紐(ヲヒ)ふ四ッ竹をそふ大坂へのぼり芝居をとられそう」とふりこふりふ芝居ハ今の戯場のおとふハのうそ只大坂ふて彼四ッ竹をうち鉦をもしをを画図みもら今の四ッ竹をうつまゝを載より此二書ふも長崎よりさし海ふこと出そう事ふ漫ちより傳しもの乃至清朝よりこゝろゝし印行の繪ふ美人の四ッ竹を抱つまゝを画るを亡友大浪ぶ家ふをさむそのうちふ本朝ふもちる物ふおなじ西鶴が記ゝ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

如く来應の濱よりそまりしや古き册子みえそめて

江戸三吟

音樂の調子三味線ひの山　信徳
四ツ竹躁ぐ竹の都路　桃青
姉そへて御伽比丘尼の行末も　信章

四五百森（ヨイホノモリ）　元禄七年周旋　是延宝六年の春の吟なり桃青信章四ツ竹ハ該比丘尼を附そう

早稲ならふる風のおもて

秋毎に四ツ竹うちのうそひやて　信徳

又かろ庄（延宝をさすなり）小西似春ぶ捌し

俳諧芝肴

（白本如此樊ハ范誤カ）樊噲と尺八と食ありけり　信徳
美女獨四ツ行うちふせてせ　集和

仙凧

「比丘尼ハ大そう　梯布子ニ年西鶴作ニ年　三の冬ハ門の中幅帯前結びにして黒羽二重の頭巾深にのむそのかぶるまうねくびもうぬとふるなし　結の二布のそそうでかくそうもう一つふらへ文章ふりわけハ態此の事也　賀耳ひきき四ツ竹ハ笠をふさぐまうての子ハひ寄くさとうくふれハ昔ハ比丘尼ハ四ツ竹をさうそうしなるべし四ツ竹をさらふ也　是ハ延宝ハ四ツ竹ハ該比丘尼を附そうなり　好色二代女　浅野梨子ニ年西鶴作　三の冬ハ

錦の子ハと　足利ふる　俤　安昌

延宝七年吟　古画本袖草紙ニ有り今の被覆紙ニ出所未考

前句　園生の未葉なるそ四ツ竹千春
附句　則て甲うち食の姥百花ハ蝶　信徳

江戸発句　言水撰　延宝八年　四ツ竹や軒端の雪の雪吹風　異風

古暦砥　天和二年秋成撰　雪乃春落花無の有中哉　秋風
四ツ竹　常雅

三吟。芝肴。江戸発句の三吟ハ江戸の俳書ニ四ツ竹を詠ふ始也「女良文」の松踊四ツ竹再検ニ「好色二代男」西鶴作自筆元禄六年　大坂新町のそをいふ。きうきうの拍子ハ金で其頃の花娘哥庵人の意そなるへ。今もあきうふのくさ」とふのう毛ハ大抵を金せんだう黄ハ色の拍子ハあるべうそ

囲ニ小西似春ハ北村季吟門人ニて江戸の人之　綾錦ニハ本町ニ住後終別

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

行徳の社職をつとめ「芝者」の初号撰集未見

再挙社職をのりて似春の文字を自準と改元禄辛酉延宝九年社職となりる翌年戊戌　烏帽子着る人まれなり今朝の春　自準とある

八似春と同じ

加賀節　サガラ節

「むらしく物語」六十年ほど以前　京傳ら宝文の末延宝の初をすぎ　称号町　狂言座よ多門座なり櫓を出来

俗小ざれ歌并少三年玉村吉弥　玉川千太郎ら恵山川内記玉川主脳ら　称号町

おそかれなきく男拍子きくの声よきく着なり是等寄合て加賀節といふ歌

をうたひ出せ」

「風の吹法」延宝二年　角田川の私述ひのうの

座頭をうのせ古近江ぶらもし案楼のう体線よ金の鶏冠(トサカ)のうあきふ為ぞせ

芦うの舟のさそうがうる祥」ま狼のうせ掛唯し怪気色もの一撥音ぐく大

ぐふひきなら」其ぞ様の形をうそ好人ぐ〳〵のあつ〳〵やとうふ加賀ぶし

いさ〳〵も　清川の流の水を敬〳〵かな舟

いまぐ〳〵のあを〳〵ふもおろんどこふ

さうをうのつをいてをぐ〳〵」

「紫の一本」天和三年浄書　京田村を吟の第ふ「ぎんとりふ育女(ゴゼ)を出ふり東吾嬬(あづま)そ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

やさしろ神かぐら　よしまつり　ささのへやろうやろう
うちなびく雪ふくさやさんがとう」とうたふ是を延宝天和の頃の小唄の節の流行るときふるさと小唄をそうじてうたふものの多かるべし扨さんがとうは
ふるくやらん　ささのへ雪のふる　玄心
とふ古狂歌を発句とする人ありしを句ハ最めづらし

天和三年宝井其角が撰し［虚栗集］ふ

三谷吟行

詩歌（かうか）をかざふ四つらぐ蛙　なる　楓興。とあるハ是ありこれ風ぶ文集ふ加ざる事のたまりいでそれを書しるして天和三年なれバ当時おもしろかるべし　真享の比つくりたる［新古原つ秋］草ふかぶしつぶ〳〵の小説を

十四

中ごろふかぶかとゆらんを。只思へども其ふるきもつとめの身ぢやうのを行をきのふの山吹をよう〳〵やうさされ移りたてよふ思へども又思ふもけふのするこげよとうたひをさむ」

又ニ子凡ぶ［行脚文集］一之巻加賀金澤の文ふ「燕楽の加賀節も此時あれ乍いで悲哀の紫垣草詞ろく遠く廃れて吟人更ふなし」是天和三年のかゝる文ありおもふ

一代男ふりふところもとへ入れしさんがうとうふ［杖の長系］宝永七庚寅年四

天和笑委集」天和記　堺町のふをふ第よ「法師ばかり此道ふなづくさふらへハ平ふ

智学智をうしなひ中暑緒絃ぞくぢのの音声をひきうへらうさいかゞぶ〳〵さん

かゝるのおもしろさうとうたふ

雨こそふりふところもとへ入れしさんがうとうふ［杖の長系］宝永七庚寅年四

寒古来中興頃ふの一百歌仙十三「三うりさふをゆろくさゝのへ雪ふへさゝさんがらう川ぢや　ざんざう柳のまい

色糸よひきうつふをかけてきこかけ筋うつひなぐり
とりへ又元禄年号印本「姥捨」も吉弥の振を
う「洞房詰図」元文三年号にて吉弥出て一番ふ名ひりし者ふ 座元森市川流三
味線の上ふ延宝 年中 京町 歌町目ゐ住 同
ふ市ゐゐ申ゐ 朗細かけぶし小名前の拵女ふ〳〵ひりし 九郎右ゐてゐな」
延宝より元禄までの名高町ゐ住」「同書」 名月二日酔のうく 揚ゐくふ琴
の音さえ二階くふこ絃かきびそし かけ筋の隣ハ伊勢踊り 松ねこえて
浜ん市代ゐゑへ」「虚栗」ふこ谷の竹とひふ今せうれハ雪糸ゐてなる
それし小唄なるべし
「鹿子品」元禄三年「今夜八十五夜の月さまづ盃とふ
のなそじなれそかぶしなどうひつれるをうふ
「京大坂茶屋雀」元禄三年刊 おようそなふのうふ幸〳〵小〳〵うてなげぶし古今
ぶしひこそぶしかぶしさんさぶし 作ごのそぶし 甲ふりぶし」
元禄十六年印本「松の葉」ふかけ筋第六うくを載そのうち名歌めきて古
雅あるぶ「下うくなり」「よやうぞれ名ハ
名うううられもうふみーんもうるふきえゐ〳〵野べの雪」
なりの五うくも野辺ある初ゐいのよぞ 享保十八年印本「辛亥春の声」と
ふ絵の書あり其序ふかけ筋の名ハ名をそれど当ゐ
「当ゐ物ぐるひ」手ふ名ぐうひぐ〳〵とふかけ筋ハ寛文の末延宝天和の比盛ゐ
おこりそれ元禄の比盛ゐ〳〵其後のさまし ゐハんえぞ
又ハ京都ゐて延宝天和の比を盛ゐ名ふる浄瑠璃うり延
宝五年十二月十旨受領て宇治加賀掾(ヨシズミ)好澄とあのる ゐの彼ぶ風の浄瑠
陽を加ゑ又筋ふも又かけ筋ふも小唄の加かけ筋と
根ぎるおとなれ加ゑゐぶ俗ハ享保十二年印本「今昔操年代記」ゐんえり

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　　ガラス使用

丹前

丹前風　勝山凡　丹前節　丹前縞　丹前雪踏　丹前結びの帯

丹前といふ事ハ神田須田町ひし丹後といふ呉服屋の風呂屋の遊女勝山といひそれ
にちなみ丹前風ともいふなれど左詳なるそ此一條ハ唯おのれが視る丹前ものを抄出して後人の
考証を待つ

理非鑑　寛文四年下の巻ふ　當世のそきやう〳〵この衣紋つくろひ者をつぐるもの礼義おもいのやう
うな好色の為ものもやうやうなをまさりぬればおのく日ごとに風俗指さきまでも古ふるびてせらるゝとそ
傾城と呼ぶものゝ風俗指などのうつり凡とかくとなりちふ抄出せる冊子ふくろにて寛文の頃うつり山風丹前風のおこりなれ
ど一話とゝまべし

吉原雀　寛文七　物うきみ故郷をもうるものゝ山本のさきも去の代までもかゞことなるそのまゝ
のこりきみ故とゝ去のこゝろ〳〵男のせうそくをまなびて今もものかんぬ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

吉原大雑書　延宝三年印本

山もと
うち　うら山

やまおろしもさぞんじよふびれいなるかこざん
さんどの月もこおろぎをぎてハよんげびう
東方　勝山と名をまるせハいすへんぜん
のうら山が名をなて山ととの赤まつふ
ねてゆめをなそう

好色一代男　西鶴作　天和二年板　一ノ巻「柳丹前風と申小江戸にて丹後屋敷前より風呂屋にはじまり
時勝山といふ女をぞめて情もふかく誓ひかたちもすぐれ
世のつねに替りて一流をよろこめて経ハもてなすを
ふまでをひぞ〳〵とあーるさま」

芝川亀年岩ま（天和二年刊）「中昔のうたのふ武江の城下

両吟一日千句　延宝廿六年

為宝暦白夜吸持（キセル）そて友雪
丹前風呂もさらくろれ　霸

慶安より明暦に至る年記

承應三年癸巳の七月廿六日堀丹後
守屋敷前の風呂屋を初て町家の
面々男女入浴ありしより其ノ一
門人山頭となる

好色一代男「丹後屋敷より風呂にはじまり江戸中にて丹後屋敷前より風呂にはじまり
時勝山といふ女をぞめて情もふかく誓ひかたちもすぐれ神田明神下より起りて
世のつねに替りて一流をよろこめて経ハもてなすを
ふまでをひぞ〳〵とあーるさま」

芝川亀年岩ま（天和二年刊）「中昔のうたのふ武江の城下
ふようくといふけいせい町より此所へ久山とよべる町の字の変異名をうんぜんとよべり
うく名づくる事此年前ハ神田丹後殿中ほどの前よりふろや町より其所へ往来ハべうんぜんの
まへを略してうんぜんと名づく中昔のぞき女ちくのふぞく何ほどもうんぜんをとて今の
世の上ゝ士のてうんとをり申ふこの頃京よりつふ
りのぼりまふ世ようつ山のひつをんがそのあをとりてまけ山とよべり

新吉原つれ〳〵草　自宝永年間の作そなのれどもそのころ実況をみしかの名行

勝山ざきよびふ義ざえもなくてきゝまゝ
ある　注　此年文そて沒下注あり　此勝山丹後殿前ふ風呂屋勤せ一ぬ風流常ふかそりビン（ヒン）髪ゆて（ユテ）
髪を掛あをふりうくべつあれが元をとりて丹前風とそて申りる此女後ハ色里
ふ活ねれ変物ふなりてひぢめん（ヒゲ）の肉衣ふ柿雑（カキビラ）子をそりつをきる面影今も
よくおもひそる」　こゝのふ如く行のふよりぞ丹前と名づくるの風流浮世ざうしふが
ゆー下ゝ抄出せ一丹前風の類あり

好色盛衰記　元禄元年印本「柳風呂ふ入て此所の滝女ふ左門（ヒダリ）とよべる風雅恵の如くして

江戸の猪山が仕出しふ稽古ものゝ
古今集序吐 (原版貞享三年) 「此歌をもて世のをさまり
そめ本朝ふかれんなり」 此冊ふ枝葉の名ところ誤
なるべし
好色二代男 (貞享二年) 二の巻「傾城の姿絵を八幅うけて御とぎする條ふ「三番ハ江戸の
猪山が一ト風かゝる男業」とうけるも丹前猪山ふ
吉原一言艶詞 (寛永の比の三の巻原吉原のものをとりふ
ところふ丹後殿前ふ猪山とて名ゝりの若衆別墅の繁昌小袖の古ていまで風
流なるゆえなり是より丹前とふものゝおこりとなりて今いふぶつ役者狂丹前とうて
立(たつ)といふんハ撃(もつ)ぱら当時ハ町ぶきふのゝしりふ大小とくなりしなるべし
異本洞房語園 (享保十五年写本) 新町山本甚右衛門が家ふ猪山とうひし事ありし繁の結
ひふハ長き黒髪を白さ元結ふて元髷の俤達ふ結びしふ猪山風とてそのころ
揚屋ハ大門口のところ多くて勅ふ出る百ハ五町中の吉原格子の名ところも猪山
をこんとて中の町の両側ふ並居るを猪山ハ今日初ての揚屋つとめの為とて
もところびれる事さもなく八文字を踏んで通ひし粧ひ万事押立双びなくえらし
こゝろ金盛ハ其頃第一と世ゝそこゝろ平蔵も女筆ハ劣ハしき能書なり猪山が
誄ふふ 妹背山ある川の海水をけてぞ神をぬるゝ つまゝの日黒
おもてのふ神ふ此事を絶せとて東の又一日東井よ参酒盛のうへまて猪山を
枕ふも
お伴ぶ三國一ぢや得やまい男女猪山ハ借せんのゝ 猪山ハ原神
田丹後殿前根津国風呂の市事を常とひし風呂ふ
女の時ふふ市事を常風呂をもて入猪山を
お好ふて芳沢方へ死を売て又枝女の勧めをしよう彼風呂ふ
指でなぞるふ玉猫の編笠ふ裏つけの褄を見
しき武士のふくこんそうり とのり多門庵なとの芝居者彼が風俗をまね

うとて丹前の名、猪山より起るといふ説も出たるなるし」と云り

堺さかふ（周せ）『理非鑑』に日別の住と成りて作者の名を載ざれど『兎の within』『開疑庫記』おの書著〳〵為信とある人そ日向のふり東歌ふ移りて住せ〳〵ときの作なり寛文四年ハ吉原今の三谷町うつりて僅に十年の後し尚吐高に丹前風猪山風などのおこなはれ〳〵を思へば勝山が抱ふ風しハ原吉原の頃なるべしされば『一言艸談』ふりふとところふよく合てり

『京四條於園教義』（注に伝授の事浄瑠璃の事など）『昔男のかぶき伝』にてえりん出る事うつき左さ〳〵ふりてもの都鄙洗練もて野の人の詞をまなぶ志〳〵ぶり丹前風と世の人の詞をまなぶ志〳〵ぶり世ハ許國が男でぐちふ事をうへて江戸吉原へきてところふえてふり

○丹前編笠

『よごれけ』（寛文二年寛文五年印本）梅翁軒著「弱ふき芝居へく人のまを

ふ条「こゝの人心あてぐ〳〵近着をこまられ服装のまうをあて〳〵入ぐれ袖をつゝぬる芝居のつうさま我をこ母この花とうる女房の紙子着るなり丹前編笠ふるぐ日の紐ゆひの緒ながき後達もつり」

○丹前節

『東海道名所記』（寛文二年印本）歌比喜の事を以條ふ「笠尼ぞ一二人いで来て歌をうたふ唱歌ハ世の日ごとけられぞたんぜんとあり曲節ありてたぶ〳〵と長さら〳〵ひきづりたるなり歌ふ次第ふ歌ぞの頃ふあるを比丘尼ぞる簡（サウ）ふのそうふきに」又同書ふ馬士の事を以條ふ「こゝに」頃ふ「此頃ハえんぜんぶーを道中ふもてはやし」『好色一代男』（西鶴作貞享二年印本）二の巻さぶし遊女の事をいふ條ふ「これこそそう又」頃ふ「昔のゝの山芝居ぎとふ少有ふらふし」と有ふ事ハ芝居の節のはやりうたを唱ふふ猪山がのを似りしれ一ツ名

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

丹前ぶしといふもあらん

山の端も [延宝八年印本] 延宝八年 紙屋やもろ 丹前の春 似春

増 小袖ふたつの 丹前といふ小袖を延宝より流行

いろをなせども丹前といふ小袖を延宝より流行

せしもの

丹前島 [正月揃] 元禄二年印本 寺山白眼居士著 五巻 商人の正朝(ごろ)の條ふ「葛屋後丹

前作金時羽織」

丹前もの 丹前紋 [天和笑事集] ふるき町の事をふ條ふ「いろき野

良ものにて有る姿なりてふ白粉ぬれ有のなごりなん

ぐらぶ得もあらずくくきりく元結 大ぶろ

ぐく菊丹前などでもやう色香をもる都源 梶色もふ裏大振袖

女ものふ條ふ「丹前雑形」とのもやうの本

つり画人ハ治下深物師 井村賭吉と又そうり丹前もやうの流行せを見し

此雑形ふ丹前紋をふつり意とふ字ふ桜の折枝袖とふ字ふ菊の花の類

をて今如賀紋といふ物ふ似つり

丹前元結 按ずるふときハひとすぢ [天和笑事集] 八巻上野の花見の

事をふ條ふ「よやふぐくつくきし無谷編笠 九ゲ外の帯せきをれりそう

五ぐらいづけうんぜんもゝひ四角まげ長ぐるいさぎ

ざしそりをうしろ髪をろろげさらぶひ中そめふものうへんとかとふなれ

が異名をなのりこと」

丹前帯 [天和笑事集] 八巻上野の花見ふ條ふ「その

品とるだて深ふきハ五寸の大振袖ゆきふしろく法ましろく高帯のこせぶ

きて中略 ゆづるをそろへてきるもひろとうふきるうんぜん帯もしろふきも

とりはをし吉原やうふむもゝおもひのこと [同書] 十一の巻 世ふおもろ 八百屋

廿

の娘七ぶよそおひをふ像ふ「もゝよきふ神うぶうそぶし若き男
をかのうしろより横巾ゐろまき丹前帯うしろふまわして吉弥もとゞ
もとゝゝゐづまをそろへうしろぎゝ「ぐるりとまわるぞよ」とかんざゝ
のひろきを丹前帯とふなぞし腰ふのまわるといふてゐし
ふなぞし

丹前雪踏　[圓扇曽我座鋪狂言]之錦絵作ふ　町家の婦女のそのを形像
ふ「下ゐ淺黄八丈上ふ薫八丈素顔ふきかぶりあさぎの丹前せきぶ
紫の水木帽子きてさと」是風流なる雪踏をも丹前をあづけしなり　[つれ〳〵草]
ふ「京ふ丹前風とてもありうる」とのぶふ「三代男」ふんえる紀のつ
糸を細で鼠緒ふせよりでうる多ゐて淺黄緒あるをもちゐふ

丹前結びの帯　[娩桜]之錦絵多ゐ江戸作　「八おぐんをいさんけんとのそでふ羅
綾の留袖雪のふり袖帯ふ丹前吉弥結び吉流南流吉弥結びとけさと」

とゐれゞ丹前結ぶふ帯の結びやうもなりしなり

丹前ゐろま　[男色木芽漬]之錦十六　浪人なれゞ氣隋の病をふ
中ぶりなぞの丹前ゐろま茶ゐ紋の花紗綾の上下

[色道大鑑]延宝六浄書　吾舟堂箕山著　近世ものなり中巻　見るべふる奴
[近年ハ傾城中ふ奴風とふゐり]
ゐハ江戸の勝山京ゐハ三笠藏人大坂ふ八重武陽ふ
[関東血気物語]も丹前の事ふえゑれど結人の作なれゞふるふ出
せぞ

[むしく物語]享保記　昔松平丹後守上屋敷前ふ町風呂を點ゐて結
ふ美婆を置し風呂ふて姫女ふ有ふぶ半纏ふる〳〵結人入込ふ
噂峰口論者ふ及ふ法度ふ物
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

風俗をうつしさるが丹前にて歌舞妓者の異をふり丹前人とゐて丹後屋前とゐふなり今なほ丹前ゐふ事なるはし」とゐのさまよりふかく丹前ゐふが始りとぞ丹後屋なへ再ふすごその人の風俗をうつせるなるべし

一説ゐのなるべし

洞房語園 ありふまつ 寛文 明暦 万治の頃を盛ふへてるかぶさ張者なりかぶふ丹前風のうつりきたりし事ハ近来みられざし

さ祢ふつる

ふるき諺ふ枠ふ弦（ゐる）とふをゐのり 毛吹草 正保二年刻 世話の部ふ杤木（とち）宿木とりふ並べ出。俗ふそれハ無理なとふ程の事なり 他我死の上 山崖元隣作 明暦二年印本 二の巻ふ「馬鹿気る町人ふを一人も（カク）ゐれぶたゝ芸ふもなきさあるべきさを限」義なりとてそのふ兵法をふらせらるゝわどふ

ゐくおなてをおひいぐるなどにいつもおく陽ふ者ふあてて。なその宣嘩ふその辻ぎふのまぶてまたゝからぬ事のく物ぐるふもおぐてきるりのふとよのつ祢の。ふこん。

ふうけぶて下がへおきふ祢ふつるおごうけちし。かささきふ南無妙法蓮華経をふ称まつ太鼓ざしのおとぶし小鼓をきりさげ。らき武市ゐのてまるふも鉄ふ杖たゝつよ言ふさへ関東無のぶくなり」とゐのり。彼鐘楠奴ふなして無理非道とふをなをふおるふ深りのいぶ古画ふハ人ゐ祢ぶるふ多祢ふ弦をうけし祢なるべしそ

俳諧ふ名ふるハ年中日發句 慶安元年 日吉拳り児ふ人帰来てかの社要ふもなふひろうをうけ祢りしなどいひそれべもふ又智慧よりやおもふらんあどいひて 宮人のかろやきも

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

ふつゝのみ 季吟

[新續古今集] 一万治三年 寛文七年序 俳諧

をもちといふべきまゝをれ 付もの

といをんやき福ふくろ

[次韻] 七百五十韻ふ 韻を次ぐ 延宝九年吟

ゝゝ談ずるぐし 芳林 順忠 かる発句もなれが宮仕の濃いきもつきよひ

附句 棒軍勇ふせぎ止つて 楊水

法ゝゝすの陰より梅ふきつれ 槻青

とかゝる此談をらひすべし

煙草の付ぐし

付ぐゝとり入事今ハ酒ふのゝいで昔ハ煙草の付ゝとり入事のと

[鷹筑波集] 西武撰 寛永十九年撰 十九年刻

前句 密ごそ胸の煙とハなれ

附句 君へだゝ呑し煙草の付ぐゝふ 一滴

又承應二年撰 明暦二年刻 [俳諧世話盡] 一名世話煙草 士佐皆虚著 付ようふ。思ひの煙

たゞこの付ゝ。との事見えゝり是等を以て寛永の頃皆いひ一事多

をありのひやるぐし

[小夜中山集] 寛文四年

前句 付ぐゝのたゞこの煙ゆるやかにて

附句 ゑびすをハ今こゝろこと付ぐゝふ

[俳諧今様姿] 維舟撰 寛文十二年刻

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

付ざる　係之

維舟柳かげうち
若多の
付ざるのたぐひ意の猶よて

是實文二年の独吟ありちくく天和四年小判行せ　蓼川師宣が繪本
[図扇絵づくし]の跋書ふ「夏の夕涼ふ吉第〳〵行てみれば老たるのつよき傾
城ハ湯なのこなどして肥をきよめ床机ふ腰うちかけ雑業の人ハおてきなど
をうちけてハ小ふまをかきしてよびよせ煙草の火ぎしなどふてごそ〳〵
もん日〳〵の客ごとをぞ老てものかふいとをもそる」とかれば吉第ふてもむ〳〵ハらひ
こる初なるべし

角兵衛獅子

角兵衛獅子越後より出ぬ故ふ越後獅子ともいふ川柳ふ
[柳樽]ふ　角兵衛とハ少人獅子をまひ
暗合して實ふ角兵衛とハ獅子舞ハ
[文画]ふ　角兵衛獅子　世の機嫌萬ふ
とふるひり画図ハ今の姿ふかくそ此
ハつありて近く右ふいづる千年館蔵の
なれバ角兵衛とハ考る文緑の頃の人
歯の尾をはやしのかぶりふつく此図もみそり蓼川師宣が画ふ郭の氏
をかぶりその他胸へ太鞁をうけしまなんど枝獅子ふかぞへるものハ又一撰が
画るり　万治元年の印本[舞正語鷹]ふ「元和のそめの頃ふや近江ふの乞食二人
編笠のくふ山雪の尾をまし中ぐりおるを也」とふとえそり是皆彼獅子

の趣にて笠ハ山寺の尾をまくゝるがいつも鉢の形と申すものなれバ文柳樽にも事じ
れど鉢の尾をかぶりとするのハ今に残りたるもあるべし
「三養雑記」二ノ二十ウラにミユ

岡崎

岡崎柴垣ハ寛永の頃はやりたる小唄なり岡崎ハ足にて拍子をとり柴垣ハ手にて拍子
をとるものにてちかき頃流行せし「ちんちりん」のたぐひなるべし「ひそめ草」正徳元年作ノ同二年板 上
巻に「琴ハ大唐寂初の皇帝の御作り給ふ事中略いつぞの頃より筑紫楽といふものありて
てひきけるそれより随ひて何ひきの盛ふ小哥などをのせ俗なる耳にいりやすく
町ぐらにとてもはやりてんそうり此頃ハ我しも筑紫などにても楽ならずまで女わざバかとし
ハおかしらんに小哥のをかざきをどりなどのみにてひきはやれバ琴のこちハたえまて
これらも今ハふるくなりたるを」又「舞曲扇林」元禄二年まづ何くてもえらる謡ハ岡崎
をはじめ紫がきとうつ事ハいまもきこゆりの頂上なれどもたえりぬれバあらくつまき
者の人なるにこれをまなぶ」とあるに岡崎をふひとひひそめ草に踊りとあるを
てらしあハせてしるべし或人今の六指子の拍ひへとみへりまて岡崎の小哥ハ
糸竹初心集寛文四年板をはじめ糸竹の書にかならず載ざるハなし今もところに

おなじくんば抜出るおなのづぞ又案ふ「大麻」[同音ニテ苧ノ枝]「都をろぎまつ。さのご景倚二ノ景綺とそなり」とふるのえをろ京ハ一枝をて ひきまつのくびまつるまつなる べし今ぬしのけうちいづれう知らぞ

同ともし二絵をそゞあてならふりのかくく吉野のとよかなへ 吉野山のうハひろぐし 景綺をひきまつるのおろくくろんえぞ「一代男」[天和五巻]筑紫の柳町のまを山第を「女郎ハ浴衣(ユカタ)深の暖(ヌク)まふ中衣(モシ)の御布(キヤフ)をそぎと月せかる甚初んさ何種。やり〳〵此種景倚を着るまつきして呂ゆまき撥なとこと」又「娘揉」二ノ巻吉原の支をふ條に「おぞまく〳〵ふ丹まるび吉んこくろんくろんこやさんのさゝぜん金銀の三所ゝ多物前ゆらるまふ弱みてんぎ声よきまふ。ぷらきい。くぞそうあげぶし如何。浴猪猪。説絶。叶のとやり

小うそれのかくろんれのゆしこと」天和 初心なるまくいひ 都て不縁ふさもなきゆふいひ〳〵いぶし若一種をそれる彼大麻 許〳〵都をろぎき二上り

芋のなそうを深いぶ〳〵ふくび約なそれ〳〵工ともけうしう牧をめべし

「繋情」[正徳二年写本]「山くるを[なををさしてる]卿町ふ行足し濱ハ客のんまをゆみて女郎も気をたゞぞ中ゆたらくさの一節おきゆゆ浄猪猪ハ土産をまゆづ多そそて かる客も感涙を流一琴三味線も二上りこりのつやなく本調子のまゆぐきもひ そうふて御ふをぐう景倚地ふのよりも気ふ産をろめこと」

些冊ふハちきりのなんど古老のらひつくへしくと出文御町のさま を服和まるぶめし二百年ふちきふ京倚のこなべし

或人の日此中ゆハ妻女のゆみてハ行ぞ「岡倚」ハ倚角の事の事をひし 童謡ゆりとまも何りん裏の家ふ服とうけてろべし。さて紫塩も程この冊ふ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

獨狂言

昔ひとり狂言とて唯ま人にて物まねをせしものなり

[いぶき] 寛永廿年吟

ゆるりと居てハ又かくとまる

主従者まねする独狂言ふ　負徳

[芝青] 狂名のるか

おそ狂言額ふるもむさ苦や　似春

潮干の松のひとり狂言　桃青

さるほどにいつぐく此書刻梓の年号あるをもて証とせんとてしるす事なかれ

[江戸絵本]

[芝青] 座敷独狂言　日本橋南二丁目　秋村休閑

南八丁堀一丁目　道夏　九老

新七　　負徳

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83

ガラス使用

等の名を載せり 元禄二年 [鸚鵡子] 六七冬を示せり [江戸図鑑] 六徳を示せり 又 [諸家大秘録] 前集九巻に 「細利元東宮童を好まず馬の名を捨て遊興の日を暮し 後ハ座数掻をひそめ狂言狂者として毎夜大酒を好まず」 とあり 此細利ハ正徳の年 ものゝ是も元禄宝永の頃なるべし 柴を葬送ハ絶てなかりきころの 冊子ハ又ゝゝゝゝ

[山中集] 支考撰 元禄十七年刊

秋なれや不残月の晴て居
活も根もひとり狂ふ
[世事談] 享保十九年刊 独笑ハ神田多町芝高屋次郎右衛門 [培補むしくさ] 明和元年の記 昔ハ客の咳を遠ふ者八年年翁何りしそう
不ㇾ歴ㇾ此所ㇾ言也 松村休閑といふ者八年年翁何りしそう
衣春秋朱刺吉を俗ゝなどゝりし又ハ狩倉馬をいふ者何ぞ

さくふりもぐる事ハ何ゝ狩ぐ明衡の著しの
偶偶唐術品ゝ輪鼓八ゝ玉。獣相撲。獣舞ゝ
ゝ会のさるゝゝゝゝ独双六ゝゝ
ゝこゝゝゝを一人ゝてまゝび笑ひをするものゝて
狂言ゝふものゝ此類ゝゝゝんとふとゝりひ
つゝ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

孔雀大夫

「花洛六百句」延宝六年

前句 群羽ぶる鶚の大矢ごろ　千之

附句 去ぬ間孔雀の舞の長ければ　友静

此句鶚ふる孔雀と附て別ふ意ハあるもそうふあるもそれど是ハ当時おこなはれし舞ごとの孔雀ぢ夫の変をふくこころあるべし

「雀海鶚」延宝七年

能大夫 三清寺の前　孔雀大夫

とよめる事を初めし又元禄十四年印本「百ろう瓢箪」とふ草紙ハ本の五の巻ちゝき頃孔雀ぢ夫と女を男とゝ偽りごせんさくなりて守ふいる。さるものゝ中ゝふびんなるとらひなれバ友遊ふ口がしこき考ゆるもてゐれバそのそづぢや　男の女ふ化(なる)ハ野良とそおゆるしぢや　女の男ふ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

だけ…ろ…ぞ字をちがやとよめるなど
雀をすゞめ女をもゝ…街説をおしなべて
かくるたぐひの例しなるべし

向しま 延宝八年印本

前 菩薩の糸竹楽曲ふかく
後 迦陵頻孔雀をる〳〵堺よりおこりて 石玉 名物

モシ當時ハ孔雀を更堺ふ例りて江戸ニ
傳集補 栄花物語 寛永二年刊鉢文版代 ニ十卷 五節のよ春日詣の巻ニ九の皇子を孔雀の王子ニ
八方物日ごとに聰明睿智にして初学独文門を出ず能ハ孔雀が比
孔を使ふ敷ハ何程ぞ仏受とつゞ

盃の魚道を豊の縁へそゝぐ事

江戸八百韻 延宝六年

前 豊の縁の葵の世の中
附 志のゝめのもとの雫の小盃

雛久 延宝六年雪柴撰

豊の間幾世つゞりて菜の雫

俳諧富士石 延宝七年印本調和撰

重陽 菊の園志の杉川豊の縁 調和

貞徳翁自注 寛永年号

前盃の魚道ふ楫が散かゝり
附豊の縁へかよふ春風

貞徳翁自注ニ「盃をば豊のふちへそゝぐものなり」とのたまふて前の句意ゆゑ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

おとるべし又「今川大饅紙」ハ「大なる奉書ふくとしれられて香れなそもそんとそるふよきに存ぜまて豊のすきまもあらぶ持てるも奉書をこのれバ其益ハ用べくもぞそ」ハ今川大草紙ハ室町家の頃うけるものなれバ古きれもそひのりしなるべし

「江戸鹿」「汐中苑」ハそこのとをいふところ「うけてこそさる盃ふさひざり巴ふ奇色」まそらぬ女郎のそらぢハ古をぞめられたるのまひのそせつるぞ馬さと」石ぐるみにのこるの等ハ紙のそんれいなふの意もあくうけるものなるべしれバおのづから古例の要ふ出ることもをらし

總左馬

十篇ちうの引錦

辻君の事を江戸にて傾城ともいひ上方にて總家の一字を用ひ左馬ハ例の呼りて添ふる詞なり黒川道祐ハ「遠碧軒記」延宝年間の筆記ハ「世俗ふそうそもんとふ遊女の事ハ總嫁といふを語てふ事あり」と記しくハうらし

周ハ此總左馬の異名ハ京師よりひろしと詞ハ「吉原ひめ尽」の注ハ「だらくさん」だりこなりのれめの名なり」ハよりて名づけしそうそ奇名ハ大抵まて好まて本居そけんだ〜敵娼ハまぐろとちうの名ハひさごハ流れをくもとらふんありとふて」とあれハ延宝以前よりありし詞なり

「吉原河」京保十五年印本手鏡教人抄ハ猿のまでうの撞木の棒　梅宇和尊

是ハ江戸の俚書なれど京都の俗言を存して撞着とおぼゆれど夜
着とも布団とも延宝の度小疎等ふたれども想ふにつよふ迫てこそふとん
ともいふなるべし

富士石　延宝七

独清を度量や　きらんきらの月　正章

南無仏潜　宝永四　会版

鬼王ハ想像ともいふ言にて

日傘

日傘ふるふ日でりぐさといふ舞のさまし［さるま川］ふ［大将頼朝を厭其日
の御出をぞくふ木綿色の狩衣風ふきあるる立えぼし長毛の御馬ふ乗ろう
おせ出ぬいるぞめきれる小馬ぞ［ハ五郎丸もえぎふるひの指貫ぞ小作りの
太刀をさき弓をもてまつく日でりぐさの御供ハ大膳の亮のちゃく［ハ
とうとうそう舞のさまし［室町家の比の作なれば日でりぐさをふるひふるしさて是
をもちふるふ出ふさしかくぶ初めて婦人ぐ青傘のふ
ものふり　青傘のふ　ちゃおり　寛永の比ふ元禄の比までの
かける日傘ふ唐紙松竹のたぐひの絵をかけ後ハ絵ハなくもれ出ぬり

七百五十韻　延宝九年印布

発句　海鬼灯乙姫香をふるたてそふ

脇　沖ふ日傘の亀あそぶふり　政定

仙庵　乙姫をふ出ふ石ありてく附ふり日本の春とふるべし

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

坂東奇聞　延宝七の年少九按

日傘一時雨之竜田川　調檄　柳ちる是ハ白雨のるん紅葉ちる」日傘と

西鶴大矢数　延宝八年吟

のそこへ四千里舞鶴の巻　西鶴

日傘一張ちる花の山颪て　西吟

仕立ふ扇の紫の藤　西悦

京日記　貞享四年京撰

曳落て蝉の小川のうつりゑん　湖春

日の傘よ雀略のくり

句餞別

若晩　おろぬ宮ふ杖訪ふ杉　沈荷

傘の絵をかく」ら傾けて　芭蕉　日傘よ日ハれと絵をかくふ

風流色芝居　ふむりしふ女を七夕のみけをさりふいぶさまを山縫よ「どんまの

[illegible]ぬあんぜのまうすき髪ハ阪の辻まてうけ　繻珠（珠ニ）の着物ふ紺足んぜの下着をかのめせ　毛琉（マウル）の帯ふ紫ちりめんの肌へ帯紫足袋ふ履物をたて傘ふ日傘ふ布袋らしうる笹繻の風呂敷き」

のき敷ふ出ぬうぶう嘱託をうさくうる日傘ふ布袋らしうる笹繻の風呂敷き」

此冊ふ江戸の末享保比の印本なれどもいまだ寛文延宝比のさまを目前ふえるぶめし　此一條ハ享保ぶわうだ日傘の考ふ合

さて婦人の用ふ青傘ふ寛文八年の写本「愚子拾遺」物語」よりぞ出し　右挿ふ躍ふふじまり其ときの町奉行水野備前守制禁をうる

よりを記　それよりさき享保七年の印本「万金産業論」小道具青紙

をもちて日傘を張よりそれぞれ江戸の末享保のそめより用ひ

なりぐし　曜ふハ今の小町巻きり此支武野俊談ふもとうる

元禄二年刻「人倫訓蒙図彙」傘張日陰ーのため繻をうきうるさ小児の

ものそびとふ手わいみて見ると作る」

宝暦ふ年板　傘ハ紙ふ油ふ引ふ竹ふ骨ふ用ふ仙鶴の下うふい紅葉ちる

青紙張のかさ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

千代見草（宝永四角牌）

秋作ホして育つ牡子
写後の杉の風呼日傘

玉しゐの品玉　松の曲の事

延寶八年印本「向之岡」時鳥の句ふ

ねとぎ人松がへしを玉しゐ

うらの六當時おこなはれし品玉うりなどし天和三年の印本「一時庵蓮」岡西惟中著ホ「道頓堀ホこそしなホのむこ亀とそ此のむのもちホ二ついこのきげ笠をのれまづへてそうその後ホうきなまよ名男俤のそぎをつくり後ホ芝居やぐらの柳とそ服装をえ着のもち

より事をして小刀を二つ日ニ六もいれまづへひとうの事なく妙をつくそそと」亟。助。いづれも誤りて是同人なるべし松がへしと曲むくへホおこなはれ名元延宝年間ホこそそそ

軒似春雨吟の漢和ホ
外良が花も槍もなりなり

蝶々子

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

枕友吾一生ヲ
銭財拙(ツタナ)嵐(アラシ)戸(ド)ニ
矛良。松ぐし。嵐戸。と附(つけ)うさまふるに
年をへぬれば世もよくなりつつ矛良とこそ
印本 山上憶千首ふ

前髪ハ松ぐしの間也 四支
憲草をそむ嵐戸の月 イツス春

松ぐしのぐるりぐるりさまを各岸ふるに是も芝居をもとし
少年なるべし 附意(ココロ)そをぐしより是等のなをもれ〳〵よりてそれを
〳〵をもちきをも古俳諧ふうにつづくなり
の浮瑠璃ふも古俳諧の落句ふ 又西鶴が 永代(えいたい)苑 五巻 多芸(たげい)なる者をもとし
松がくしのうえそうなぶ 「小うた本ものの名人浮瑠璃ハ山本角左衛門(やまもとかくざえもん)とうろくべ蒲燕ハ利休ふ流れ

をくさもんさくハ神楽願西もなぐでおげ。松ぐしなどいまへの俳句よ
横ふをうつせそこ」とうり出書元禄元年の刊行なれば其以前ふ傳肉と
いひし松の曲の上ふ句ぐしなるべし山歌松浦
正保元年著 「なぐさめ草」ふ 芭蕉人ともよりの句ひそのそぶ中ふ 人本松が句〳〵
句のてうき初句ふげふふを名とそ人の好むところふよりてきる。又二ツ
ふふをいう種も自然ふ久をこぶし 「一ツをそ〳〵ひな肩ぐるり〳〵
とまわりなどして色ふのたをふれをもる」 「松の曲の起りなるべし 近年浮瑠璃の浅草の松井
座のごひいきにより初ぐ松の曲の起りなるべし 天明のまり 又さうしが其後絶(たえ)うり
浮水が松枕の曲をもうる絵本が初ふころ 天明のまり
人倫訓蒙図彙(じんりんきんもうずい)元禄 「放下(ほうか)ぢ 二字訓の意(こころ)ハぶちくぶちくし禅家ふおいて諸縁(しょえん)
を打捨るを放下(ほうか)ぢといふ其ふんしとこそべ 鼻の上ふ三ツ物をし松をそ初て
自由ふつくひ山の芋を鎗ふもる類皆是を化ふぶのたのをおそもそ又

万事の商賣を放下して物まねとなりあきなひせずして書籍毎年に新版よしと云

「よづれ草」慶安二年著 寛文三年刻 今のよのありさまをおもひてみるに何事をも以儀と「うでおし

まねおし さる日ハ何がしハ當世の枕ぐいを手がらとし」と云 當世とふをば

されバ慶安の頃あつまりかとなまれしなるべし

「出来斎京土産」延宝五 四条河原の条

因云 外良ハ原官名なり 透頂香ハそれが家法の薬なれど ういらう外良といふ

が薬の名の事になれり 此薬むかしハとりのけ などもまそれまれバ 香具の如く

なりて芝居をもかし 少年の賣ることなるべし

此薬などなまそれりし所見 外良賣と云 根もまた何し見

煎餅屋の看版 并 餅屋 菓餅製 種々

今菓子屋の見世に丸き額へさまざまの繪をかきたる看版をかけおくハ

昔の煎餅の看版の余波なるべし

「江戸廣小路」延寳六年

看板に月こそいづれ煎餅屋　酉水

「宗因獨吟恋百韻」寛文延寳の比なるべし

前　のまんにちらと伴の月　宗因

付　立よりて餅屋の見世に茶しよ文　同

是等の句を併せ見るに 延寳の頃ハ煎餅のかたしたる丸き看板をいだしゝ

なるべし それがいつか繪の額となり 地紙。團扇。の形をも交ぜしものか

因云 寛永十五年印本「毛吹草」慶安の年号あるハ例の入木ん かさねる物の品々といふ條々「雅

ハすなり 理にかなること せんべいハ竹の皮にかさねる うどんハめん棒にかさねる そく

いひへらふかさ」といふ事にて鉄器の焼形なるもの
めし物なるべし元禄三年「人倫訓蒙圖彙」六巻ニ
名物なり」と記し画図ニ箸をもつて火鉢ニかきて焼ところをゑが
け黄餅の形なれども角なる飯椀形なる又享保二年の印本
「絵室色縮緬」西澤一風作の絵ニ女房とおぼしき女ハ蕎麦をのゝごくふ
黄餅をのし棒ニ大箸ニてやきをるさまを元禄の「人倫訓蒙圖彙」
ニかくごとく焼形を用ゐ享保以後の物ハ又楽ニ元禄八年印本「西鶴
俗ゑん」五巻ニ「天神市ニ女相撲やきとうふの
画ありてこゝにハ女ニて豆腐の焼形ニ似たり是等ようなるひつき
なる物ハ今もなほあるまゝ「色縮緬」ニ
べい等の名目にて絵ものも花形の黄餅ニ糸を通してさるかつらにのり
なるべしせんべいの名ハ貝ニて「筑前続風土記」ニ貝をそり花煎餅
の名ハ「玉滴陽見」ニ載る明暦二年メツタ町又左衛門ことニ落書ニ
「徳利一ツニ時絵の盃二つ女ども〳〵阿部川餅菓子ニ黄花せんべいとうたはれ
こゝそこるがなもあるべし

俳諧晴小袖　寛文十二年印本
一雪撰
うすあハ花せんべいのもちつゝじ　如慶

江戸系慶　延宝三年
言水撰
七夕　棣姫花黄餅や多向草　如船

江戸姫之鄙　延宝七
言水撰
よの河ハもるべし花黄餅　松風

是よりさき元禄二年ニ刊行せし「毛吹草」和泉の國の産物ニ海會
寺の鬼黄餅とありこれ是等ようなるを名ありしなるべし「堺鑑」ニ鬼せんべいの事
あり

又寛享五年印本「庭訓往来鄉抄」ニ載るも飯糰形の煎餅なり延寶八年印本「節用集大全」ニハ「くるくるする小判煮餅」とありて是乾煎の「江戸廣ク」ニ。あさがほ煮餅。萬煮餅。萬の名あり。あさがほせんべいハ花のかたちニ似るゆへの名なりとぶこれも多事なり

「江戸名産」出ル

あさがほせんべい

「富士石」延宝七年 日新もち 家の朝皃せんべいを 曲言

くるくるせんべい 葛煎餅ハ葛を加へしものゆへしめりやすき布のごとく紋をなせり

ひらひらせんべい 萬のごときハ萬ハ折ゝにつくりて見らるゝ

めをとせんべい 夫婦の名ハ未詳 夫婦をつくる布の名なりむかしハ

めをとそれ〴〵夫婦の名ありハヒ「めをと夫婦」めをと夫婦

めをとの皃ゑがきめをとの袖を觀して袖を著ふかし

「道不知日記」 饗嚊をねむたけりとあるも是歟

あそこあめやかこゐゆきせんべいとそ

「向の岡」延宝八年ホト撰の 煎餅や 紀葉くるくるする

佐渡國の產ニ黄餅石とゝのへり是黄餅形の無き前ふれなれど 「和名鈔」煎餅

〳〵今塩煎餅と云ふ物ハ何ぞうの石を見てむりのせんべいのくるくるする

でしさそこふいそんハ未ふ作をつぎくるゝ 水 似水

揚氏漢語抄ニ云煎餅 此間ニ云ル油熬小麥麵ヲ之名也」とうりされバ

煎餅の名ハ古くよりのものゆへ其製のさだかならぬハ前ふりふところ

と思ふそ考へべし

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

京順礼　江戸順礼

むし京順礼江戸順礼といふ事ありとぞ是ハ富家の婦女又茶屋物風呂屋物などのごとくしく費多の類衣裳ふだんを尽し笈摺胸札を付實の順礼のごとくそぐはず洛陽三十三所の観音へまうづるを京順礼といふなり江戸順礼も又是にならひ実又大坂みなみなり

和漢三才図会巻五十三所観音の縁起をのせ

實文四年の印本　[花洛物語]と名づけし洛陽三十三所観音の縁起を載せ此文三條あたりより実文をさしたるを載るなり（実文ハ後花園院の年号なり）又

文ことあれども近松門左衛門作の浄瑠璃[曽根崎心中]元禄十六年の印本　観音めぐりの節曲（フシゴト）文句なり左ありて人そそる殺生ふびんをそそて勧ぐし

[花見年慶]元禄四年印本　重徳撰

前　秋の野遠き鐘の音

信徳

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

附 艶女（イロ）脱（ヌギ）さけ袖のうら毛ふ　同

ぬきすみのすそ　慶安二年印本雪舟『我集』富士山を詠て　富士の

腰より下ハ白妙ふ夏の衣をぬぎさげてふる

『萩のすゝ』元禄五年印本　其角撰

前　假屋形久千部ゐれば青畑

附　京順礼のつゞく腰かな

『麦林奉納哥仙』翠露　享保十四年

扇の店と恵風もふく

洛陽の三十三所も中休み

『蠹集』其角京五吟　自筆之写本

前　眦（まなじり）小京の女の新そめ　神叔

附　三十三所小京のやうにぞや　其角

只丸

其角

是も薪荷日是も京順礼の句なるべし

寛文六年印本『年代記』「万治二年洛陽三十三所の観音此頃より初り尓

少あやまりをとゞむ寛文六年まで八年ふある」元禄十六年　印本『大振袖』「ひ

の頃より洛陽三十三所ふ歩行を運び初て中男　今様ハ四十こえる者ハ

一人もなくなんぞ　無きさんの前前髪だちをの雪踏をさゞして何ぞ

くつらぬるも帯のゆるぬ着ての紋足袋浅ぎちりめんの脚まき紫も一

きハ大模様染嵜の振袖かゝせ女の町く色とりて」又「ふりそこ

ら処浮世ふ叶ぬ順礼其頃集ゟ向十人ハ云を祈る袖屏て一すぢなでて

男ハ皆観音廻りからくり」

『難波鑑』延宝八年印本新法ふの條ふ「尚所ゟも近国（チカゴロ）より三十三番の札所あり

て人々ハ順礼ゟ女ふなりぬ」証あり又『好色入子枕』正徳

二年板　三夜ゟ大坂の蜆川の遊女の事を以ふ條ゟ「野田の藤ゟ振袖の賞見

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83

ガラス使用

三軒屋の觀音（ヘセ）つゞき秋明の雪のつもりのけるのこゝろ
まてこゝろくなのこゝろ」

江戸順礼の事傳說の集ありいまゞ見をそ「増補昔ゝ物語」ゟ「實文の順女順礼と号し笈摺をうけ江戸中の觀音へ参詣せしが是ハ閨帳めくりの事ゟ甚後川の善光寺へも右のごく参詣せしが是ハ閨帳めくりの事ゟ和て早速止るなり」是証とそゞし此冊ゟ新見老人の昔ゝ物語を寛永の比の老人直仲麿と申人增補して一名を中古風俗志といゝさて。

文人曳尾庵が所藏ゟ遊女賠山が順礼の姿ゟ見ゟ實文の事号ゟて昔ゝ物語ゟ引ゟよく合ゟ是江戸順礼なるべし

順礼かるく考証

傳云
近ゟ他ゟ
ゟ報ゟ仲
ゟ記云
ゟの節
ゟ
ゟ一画のゟ

ゟのかるくハ元祿年間のかぶき役者の姿絵ゟて京順礼江戸順礼なとゝゟ事のゟの文京ゟ
ゟ大坂ゟ
ゟ世ニ所
記云ゟ
ゟ
ゟれハ
ゟ
ゟ

おこなゟれし頃の洒落ゟり難波梅園ゟの花笠文京ゟくられ文京又それを号ゟて号ゟかゟりし京順礼といゝ衣裳ゟだて我尽し笈摺を背ゟひ胸札を掛ゟ実の順礼の如くそゞろ洛陽の観音の霊場をもめぐりしなり

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

奴ふとだ

むしろ江戸ふ奴詞とりをたのり又六ふ詞もりよ是ハ山のよ奴町奴などのもつをつらひし詞ぞて関東ごとりよハ此ごとなり其頃ぞて俳諧をなるを奴俳諧とりよ正保年間の作百物語世間ふ「近頃奴俳諧とそ人のさはるを咲ふ其の事なるてふとふ句ふ又有る

　繋水よりなる氷なる

とふ句ふ有る　寄つ法ともを雪の朝ぞの」とりれバ古き頃れ」印本ふもりしとなるべく奴俳諧一冊と書目録ふりれども未見ちごう寛文年間の古寓寺を得うご其うちふ彼奴俳諧二百韻りり例のさんなるもしろふて其頃をえらびてそるふ今ここそ寄もある詞もりなるハ発句をりげて泊しりるハ詞のみそういで

寛文七年二月　奴俳諧　知等獨吟　判の詞昨夢

ひつひけさ　初冬三味線のいと掻
き絃を引つゝみて神めをかきおもをあ
種美翁を或人坂ふ三傳の奴かいでくもし一枚絵を乞ふ翁その絵の上ふ詞書
頼り「千住なるところ柿うり婆めをつゞの柿のまく　ものひつひけうん
のめさくとんぐふ」こゑ禄十七年の冬　松の葉　二ノ巻二答をそうよふ唄ふ
「ゑもそもうえきも人をのうちよやぢてなぬ　ひつひけうんのめ何をもをもぬくふ
蘭ふちがや　笑の奇
種美翁ちがやの翁ぢの翁ぢ仕誌のえらちひさくるのつゞまり）
おとこめる　酒のかをうういこゑ
男ごての身ちがひ　なうまん八がをそぐこゑ
種美翁ごまん八ふ酒の事なる下ものんそそる百翁の書ふ「吉田のなふがし
がいつけめく筆をひつくんがものんなぢる王をなひさろぢ（柘榴）うんがまん八ちを
まくふづき事をちんそふ王」とゐふふのそをせて知り
奇薬みるこがく筆依ぞぶつくなり
種美ごぶつくな今も関東みていふをぞなり
竹ふこうはくいるうこうぶり
ひんじよをを着ちよろとえそけらし
おやぢ前の竹ひんじと年る着さくうんがたゞくこそ大
小をぶつけくぞ
種美翁ごう異本洞房語園ふ曰「元日基をを
親父ととひうんがこ和宝永の号の中頃ふ
親父ぢ前の竹連子ごとふのおつくやく
事ぢ前の竹ひんじせて一夜いちぎとだ
親父ぢ前の竹ひんじいるまやもちぎろ（ものの手仰のなぜろもの）」

とゐの夫婦せんざし世中興る文の頃までハ人皆知る事也

初瀬ふひつぢりのげし　勇ふげて

川狩のいさゝひにてそなも〳〵

種考ら面白らを面白ゝと物ていふを今もつの

蘖のさ松まに月ハてっゝう

うつさでなふ老うをくれの月　だんぢ

種考ら老うをくれとふハ古き小唄の頭丸本解元禄十六年印本「松のえだ」ふ載る。答をどう。とふゝくふ「そんどをよめてお江戸ふさめぐてんがかゞやく

ひくりをくれてきれよふそでこと」とのり牡考ぢし　上ふ引さるんのめもさい唄

ありおく〳〵奴詞まて作りし小唄あるぢし　再按ぢ考うをくれるといいさるひ

をとゞまる事し　扇で風きるあぢさゐ類と

よどぎんせゝよ　圍基のあぐさゝ

種　考ら是ゝ寛永の末より「いひそめ」流言なり寛永廿年印本「薬師通夜物語」ふ「世ごろハ又よどぎんせゝよ」ともいふ支考ぢり「世の中の時勢詞を俳諧ふ志ようき事のつゐでしこと」又「百物語」正保下の巻ふ「ゝるとて百歳人の見せる其中ふおくーき旦ふハよどぎんせゝよのうゝきにて。つゐのおきあのさまのこと」多くいふこと以上和篇う獨吟百韻のうちよろづ〳〵なりと来る判者作者の詞書ふりそのうちふ「我でさなんぴんちを助ぐこと」とふ事ふりちを助ゝ来考ぢんひんと愚なるもの〳〵事ありえ福の神の印本「姥捨」五の巻うき世ぐひとてるものを嘲るとぞふ「ちぐん十ヶ条の大そんぢうそれん。なんびん。のび助。そんてき。小凡。るふ小判。さぎおるよ。たてぐ。そゝ。おぐこゝ。そう作。をぐけがれる異名をさぐること」ちえ助ハのび助の寫誤乱ぢゝ考ぐし　そんそれんのさそなるよいそんもとのそゝ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

帯子のすそいふでし

西山千句

もゝしろの袴を綾なるらん
白髪を鳥とやへどうなづきて

宗因物がたり 男ある者をさぶらひとやらにて
なるべし意なり

師走月夜 慶安二年
季吟著

あまり雨まそれをぞ波
ちどり花かつもるらんこをぞべく 正章

兵庫髷 嶋田髷

何ゝ物の事ふ兵庫髷といふ髷ハ慶安比原吉原兵庫屋の遊女がゆひそじめとらハ信ずべし

太平記 寛永十年撰 前 兵庫の者よ只今御免あれ

浮 けがをしてゆく女房の髪のそげ 重頼

世話づくし 承應二年土佐國皆處撰 一名世話娘草 前 ごめんにのれさるまゝゆく同もひきせぜて

浮 兵庫の恨いそぐぞうを

浮 女房の髪のつげやさるらん 皆處

是等 毛吹草 ふえそろる兵庫のものハ御免なるとの説此説いつまでのときゝとを
うけて兵庫ふ女房の髪とつけゝれバ寛永の頃より兵庫髷とゆ多国にをりふしぬらん

花鳥餘情集 寛永十五年西武撰 大名 兵庫にてふつまぬらん
髪をひけつてお立ものらん 長元

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

君の遊を宝亭ふいひてけいせの逃ぢよいひうけしるなどし

按ずるに安齋隨筆「按ずるに」の条ふ「一兵庫鎖の製太刀の足ゐする鎖ノ其製銀の輪を細長ク〇如此ものを二つふ折て又二つふ折て又〇をいれて又二つふ折てもの〇〇をいれて又〇をいれて二つふ折てと」

ところ〳〵〇をいれて又二つふ折てもの〇〇をいれて又〇をいれて二つふ折てと」

髪をつのの如くてむすびて兵庫鎖りの製ふ似るゆゑの名やならん

貞享四年印本「女用訓蒙圖彙」ふ兵庫髷の図ありて古画ふ「このところとのせられバかゝるびしやうなれどおのづから近年まぢく遊女ふ「なりしが今ハそれも絶ることまれり」近年ゆひうるハ古画ふ何ともいはず大ニ異なり此髪の名ハ遊女ふのみ強しも有彼兵庫屋ようなじまりしとふ附會説をまつまでもなくぢふてうるゆゑよしとふふハ一のよぢざて。寛文以後のさし絵ふ兵庫髷の多くあり寛文以前ふもくづ〳〵それがもとしう貞享の印本「一代女」ふ見ゆ

「當世の下駄田舎ものを統びいぢしまるゆへ」「按ふ手づくへ

をつくりまつりる其時ふかゝり兵庫曲ふるし五段曲ふぐるしと」又元禄の印本西鶴「俗つれ〳〵」四巻ふ「四十四五なる女もしを今ふ兵庫ゆげをしげふ淺黄うこん裏のきこまぬり笠ふめつきのごん

をうるせいぐきもふ赤いーめ然よろづいなる来躰と」とゐればこの兵庫髷ハ寛永ふそじまり貞享元禄ふいたりて廢れしるなどし

中山集

京拾遺 寛永六言水撰

黒髪ハゆふ布さらさ兵庫髷

小く活ゐ頬出ル鬢よ手束弓 言水

兵庫ハうく笠もうぐるし 李可

これもいる物の本ふ下駄田とゐ髪ハ東海道の宿の人妻女の風なるたじまるもと記ふれど何ふよるてかくいふ気そのよるところを知らざれバ詳とありがたし又いるさしふ下駄田万吉といふかぶきものゝ髪の風なるかこ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

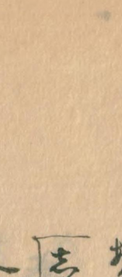
ありとあり此島田万吉の名ハ「山州名跡志」四の巻廿一丁ウに寛永頃の撰り
芝居の太夫元の女なりとハ見えたれど一風の髪をゆひいでし事はさき
冊子に絶て所見なし　按ニ是ハしめだわげ（わげハ俗にたばわげ）の下略にて
めぐの通ひにてしまだといふにて島田ハもとより仮字なるべし　しまだも
よくたぐわげなりとんぼがよしこれにもあげ島田。下ケ島田。かご島田。
結家島田。等の名有りてさまざまのかたち有り古画の図に何も見せてくはし
くは序が随筆還魂紙料にいふべし
万治二年に刊行なせし中川喜雲が「[illegible]」に「昔女の髪のゆ
ひやうハ名所の名にかへたといふまで兵庫又ハ島田などいづれも所の
名ぞ母といふ也」是ハ説れにいふて証とハなすべからずともしば加なく
ぞありときゝひがめてさきに志るせ物の本にハ實事のやうにかけるもの也
又同じ万治年間の印本「東海道名所記」二ノ巻に「うたやをさしてゆく

男なるも女ならんあらんじ姿あり何ぞ疑しからむとへば島田より出しまでかくれ
ぞもつひに所縁の結びあげ出とらふ　ちらく噂て島田の事なれば疑ひをゆう
くる事をよくさし入しといふこれにんつきて
さてぞやの女たちのつくもがみせめて島田にゆひよしもがなとよみくらべし
春元の発句に　名にゆふやげにも島田の柳髪　（此句万治二年己亥三月奥書有る印本道中記、卅八丁ウラニ）
アリ春元の句こゝに載るがめし　よみる面影行とそこゝいしこ」とありこれも島田と
いふ髪の名の起りしといふ証にはなりがたし又
「小町踊」寛文五年　里の名に柳のかみや島田まげ　立圃
春元の発句に似たれば書載ておきつるなり

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

籠屋の看版

近年まで籠屋看版をうけるものなり湯島えんまん寺の初より年々のらご子と
今も有る形を藁もの如きものを竹まで編る物あり京傳筆写ふ刊行せし
[もろく人百人一首] 近藤ゆ五年清春画 より載るかごやふ
又延寶七年の印本 [俳諧富士石] ふるえる 初秋の景



今朝の秋籠屋が軒ふ初うれしき

かる吟もうれば延寶の頃までハ籠屋ごとふ此看版ありしなるべし

此富士石ハ江戸の俳人調和が撰なり 調泉ハ調和が門人なり

これのふうぎらそ天和以前の江戸の俳書ハもとしのさまを考

る事ありし 惡しきみ火袋のこめやきうりん今ハ甚切

妾かくし

調泉

桃の綿撻 藁の繪撻

[今様姿] 維舟撰 寛文十二 [大井川] 日上 延宝一 [大湊] 元禄四年 漢和 小撻の綿まりやの洞見やまの條 千之

[古俳諧記念碑] 注 万治四年印本 小撻の綿 或人の曰甘見のうそびのそびの小小撻ふ用ゐて

綿をかくものなるべそこより上をたり大旨をとふふ心のもそびなり

[其袋] 元禄三年 屋宝暦 山海の撻置てよ離れ遠びて

周のよさきふり用ゼ [俳諧五節句] 寛永 まで

者ふ初ゝせんとそ 綴るそ 俳書し正月のまゝ。五月のかぶと。七月の

のぐひ百手俗年のむしのさまを陸のうそびなるべし

集俳補ありひとの冊子を著さんとそ草稿書 載ありれバふふハ

いそぐで又ゝ此五節句の俳者 内田順也ハそぐめの名辛苦 [俳作者名寄]

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

をつれゞ梅盛が門人ども『玉海集』『新続古今集』『甲斐集』の類ふ内田平吉と云もの十余集、寛文十年の改名せし『百首の頃ハ京堀所ゟ住貞享の頃ハ高良ゟ五節るふ此日御酒を拾ひて薬の後花を此著述をうばふ御酒を拾ひなぐさし当時綺麗の酒ゟ古伝日記をなげくらハ志ゟそこ他者あれどそを此五年ゟ孫ふ拙訳字眼ハ勿論字おこつる九日の雛をも過ぬや玖髪翁　徳也

伊丹句合　享保十九年　三ノ九オ

躑躅のちや半事

躑躅の花を愛さま〴〵の奇花のそさへ寛文の頃ゟ延宝の頃盛にして

躑躅椿等當時鳥ツ獣ノ様子之を總メ可為御学問妨之」とこゝ延寶三年季吟湖春。正立。この吟の「花千句」ふ

童ふ花をひとそへなるよう〳〵八重ゟ

そめる躑躅のいろ〳〵の色

延宝五年印本「秋の夜の友」この巻ふ「此ごろ世ふもてるものハ五月つゝじ

おそ上下もてなぶらるゝをぶつゝじも花ハ蛇景桂てなるそゝさらつゝじも花ハ人でなをを思ひまんがもとゝぶつゝじ赤。白。紫。うす色ハ色。千葉。五葉。咲るけ。いろ〳〵何ゝなく〳〵ゟをなをよさらぶ赤もをあてゝ見ぶやとありひ三種四

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

五種といつゝあやめが源氏手れいをそろへ。白く赤くさゞはらぬ八重は梅のふさありて名ある句ふ十五葉の名月もなを明の季月（アケリゲツ）。清白八こゝな白くらん。いろその紫六花のゆるやかの名もをるしうへの志ろ〳〵おわくなりて。雄の字木の花ぞもい頼をあるさゞ。ぬる世ふ白き千葉のさつまつじあるさ四名ゟ諸國をなり称くまも。

こと」是等証とをぐし　又天和二年印本

武蔵曲　千春撰　江戸の人〳〵

錦とう都ふ堂ちん百つじ　鹿苑寺
壹花ざく〳〵　二番　山吹　千春

實永ふ百種の椿ひろしがわく百つじとの
と股をさゝて書こゝふ。さくらと山吹とつゝじの名ふとをゝ〳〵句や

草木地錦抄　寛文　印後ところをし　草木のうち小黒新つゝじ。唐つゝじ
大キリシて。等の名ゝそう是等も称つゝじのをゝそれ」刻もちゝゝゝゝし
ものゟ

新流大筏波　百種ゟ撰

ゝゝゝゝ延志まて待ぬ
ひさゝゝゝるつゝじの花やゝそゝらん　山ゟ

夢見草　明暦二年印本

写繪ゟかゝふ金ゟつゝじうゟ　頼廣

續山の井　寛文七

ちゝを歌やゝゝゝゝつゝじ花延　石及

古今屑　延宝三　重安撰

一桐伯二番ふ源氏つゝじゟ　意朝

落花集　以仙撰

一枝をさゝぐらんつゝじゟ　實足

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

色好ミ志らぬ源氏　つじ君　晴長

長者教

近松門左衛門が作の浄瑠璃「博多小女郎波枕」享保三年卯年に長者きやうと云曲節(フシ)有り「むかしの黒ちやでハ細眉つくり。志ぶのきれハしびらもの好み。あたき井戸ハそこの入物。蒲の尾まで錐(きり)のさやさゝせるせ傘。人ニハ出家難節(フシ)ニと」なんどいひて總て各惜ある事のミ云つめたる文章なり。案寛文の書目録に長者教一冊と有り天和元年の直段附書目録に三匁(こし)とあれバ紙数の僅なるものにて古く長者教といふ冊子の有りてそれになぞらひて作れるものなるべしとおぼゆれどもいまだ其書を得ず。元禄元年に刊行ありし西鶴作の「日本永代蔵」を一名新長者教といふも其長者教に比しての名なり。此長者教延宝のころまでハ世にかくれなかりしと見え俳諧の発句に見えたり

「江戸廣小路」延宝六年

笑　ぎざかし京衆ハ志らぬが疵ぢや

長者教 紙ふ被て失ふるも 兼豊

江戸向ふ島 延宝八年

出 さそもしも猶いるゝや 長者教 蝶しる

兼豊が句のごとく猶れてや失ふるんさきみもいふめくいもで此さしてるん

ぞ

ろくね 宝永頃「成のこゝろぐし」不角撰

手供を林もしてえよりう

芝栄之笥子夢繒（サシ）の長者教 夢雲

近松門左衛門作 出世景清の名句ふを今もまれ〳〵ふいふ人行う嵐の尾ハ

さもとふふこそも御諚の句ふえんそう

續猿蓑集 寛文年間集刻

腰 きうのさゝぎでどぐる出れ音 玖也

あぐる夜や嵐の屋もこゝぶらん 同

是ハ百治の吟の吟なるべし 紙長者教ふなふひての句允

又これ等の六とをさきふいふてそれをひらめて長者教

を作るもの允さまふもいふめくなのれいまで此長者

教ハえぞれどもおしもかり易ふふ寛永の頃刊行あり、

冊子あるべし

かく出るのち長者教の古印本を得う 墨て寛永四

年の印本しるべし 近松をうの名をとりるの〳〵 金その別

本ぞ。させるせ奉等の詞をあし

紅梅千句 承應ノ唫

弟 長閑も千部の経をかりひろう 友仙

附 長者のかをつぐるゆしまし 可頼

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

此句おもしろくいひそへたれどまぎらはしき長者と附そへたるそのあとのやうなるもの

酒中花

やまぶきの蕊（シン）をもつて花びらさまざまの形を作り酒に浸むれば美しきものを酒中花とよぶ此物ふるくよりありけるにや延宝頃の俳諧の句に

ふせ〳〵ものを酒中花とよぶ此物ふるくよりありけるにや延宝頃の俳諧の句に

[俗つれ〳〵]（元禄五年印本）

其の事をいふ後に「同じ横町に作り花の見世をいづるまでかるい世帯を」

桁ふやつて桜を干る時酒中花ふ売ける是にて小銭を両替ふるもえゝひろふるひろふるひつまぬきを」とこゝにてさし絵ふ。長崎。酒中花。

法ケ花ともいふと書たる書板又延宝六年

[俳諧江戸新道]（春の部）

言水撰

酒中花やさゝ庵のゝ野川　樑青雲

此華の句を合せ考ふるにそのかみ漢土よりとり来りしものゝ花又を漢土よりとり来りしものゝ花西鶴が文をよれば元禄の頃へもや何ぬふても製せるなるべし江戸浅草の名物のやうなりしいつの頃

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

ようう考

江戸向之畳　延宝八年　柚の花の異酒中花の盛なり　少羽

是ハ柚の花を活ふいれ〜を酒中花ゝ〜吟なり

洛陽集　延宝八年　雪國へ酒中花ゝ〜柚屋　計也

俳諧雑巾　延宝九年　鍋の桃いまゝ柚中花とゞし　一有

殘燈六　延宝九年　残月庵清風撰　柚中花や紙赤人の孤独し　一中

東日記　延宝九年　言水撰　柚中花や今刈萱の名のあとゝ　言弓

類林一句　天和二年印本　調和撰　薪乞ふ柚中花や精舎あり　青村子

茅の句なれば延宝の頃よりもつそう世ふ流行しものなるべし

いうせん扇

昔いうせん扇とい物ありこれを風流なる名なれば俳諧の句ありべし

れど未見西鶴が好色一代男　天和七巻二回「人のえらる程の大臣ハ服着ふ陪し俳も

上ふハ卵色の縮緬ふ思ひ入の紋紋帯ハ若衆のまゝひ織ねぎろふくれん黒

きふ絽天鵞絨の表をはけ町人ごらく七処の大服指をゝ〜又してあい紋

を懸狭の古鍔ちいさ〜柄長く金の四目菊ふつて茶色が若色の糸革印

紋ふ名華の巾着瑪瑙の二つ玉唐木細工の根付ふも土本祐善が浮世絵と

きく〜の鳥紙運歩織の袋足踏中ぬきの細緒をゝさゝ大茶屋西ふ筐杖

りもて名ある古敷のたくこそ〜ぐるふそも町女郎とさるでし」とゐれべ

浮世ごひさるの〜とつそりて年〜春ごひし又「好色二代男」貞享三年五巻ふ郭の

名物をなべくの條ゝ「桝屋ふ紬ゆあせん扇音羽ふあるふ今の世のそう物ゝ」

又吉田ふ住ゐ画ける「好色二代男」貞享三年印本の序ふ「宗傳ゞ茶の加ふさん

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

同を志のびても由禪師の折をうかがひて」
庵師中川喬二子を夢の下に「ゆり起して「世中捨家捨て」ゆかう」又西澤
一風が俳諧家繪巻「元祿十三年印本」に寒き夜を板新町通よりの條に「玄
路の里ふ行人めんくがなりくゆやなりやの聲づくろひさまざまに無言のこころ、
ゆるひ紙れ長命草入きせるなどこふ友禪畫ふ焼きんぢくの体ざし
家ものゆるせ貧俗の色と味線「宝永四年印本」四ノ巻ふ「宝永四年印本」
畫がうえ秋らが指ハ十一本骨のゆくぜんが絵ふゆくゆく茶筅(セン)を
ふてなぐれをふそそるとふ古事ぢやゆ」とふことにのべいくぜん畫とふい
さんじ物の圖畫のこびた「野傾咲分色羽(ノガ)「宝永三年印本」ノ巻月錦ふ「ゆくぜん
畫の要ハ銀づくる」とのれが天和の頃よりおこなふん宝保のころまでハ何を
しものなるべし
いま世ふ云ふる京都の染あるをふてぜん絵をよくも今もまれ〳〵

ふつくるてよく人のおもふところ或人曰いくぜんハ原友染をさもぐの色を好
染るとふ染物の名なるそれを絵ふ移名をとりて由禪幽禪祐善などさまぐ
文字を書かへるとふり

古今我集「元祿年印本」畳折ありと主君のおぼせられば
畳折と申ハ二枚の畫をてつくるをのをけぐゆくぜん 描者慶安の頃
浪や山の帳くくりんで「元祿二年」古ぐるぶとまるらふかさるらふやしもふ弟子をびて橋
角のやぐらを見んハまるふ花のこころをふおやふなとらぬきまるる者とられもゆくぜん畫の
九いちをいとひのまやくみて」

幽禪ハ加賀の産にて書を無禪ふ學ぶ加賀染をよし後ふ自らの風
みて一流の染をおこしくるとぞ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

安阿弥の作 并 市守長者

上ノ巻

和州舊跡幽考（延宝九年印本 林宗甫作）二の巻 法華堂又金鐘寺ともいふ條に「北南のかどにあり 修ふ」「北南のかどにあり 修ふ」市守長者の大黒天安置の屋とあるより善導大師の像をうつし市守長者の大黒天安置の屋とあるより善導大師の像をうつし五劫思惟（ごうしゐ）の霊像なりとあるをもて安阿弥の作りし佐陀なりといへるなるべし 又安阿弥の名をかくしてそれといへるのみの人々も考

南都名所集（村井道弘著 延宝三年印本）二の巻 東大寺鎮守八幡宮ともいふ「北社南の方なる石階ハ聖武皇帝の御剃髪を納め奉りし所なり 又新造の屋ありて安阿弥作の阿弥陀如来おはします 又五劫思惟の阿弥陀ハ唐より将来せられしとぞ 善道大師の作なりといひ 俗よく一躰ハ五劫院ありし時の大黒天なりとぞ これハ市守長者の持仏となり」十巻「松尾寺ハ天武天皇の御子舎人親王の御願なり 中興ハ行基大師の御作の大黒ありし 市守長者の安置仏とぞ

庭訓往来古注（天文五年頃の写本）「建慶ハ後鳥羽院時人也 甚多 法慶同安阿弥作陀仏と云者あり 今ノ仏師ハ甚未流ニ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

古今集 文治奏状 新つ名 雅の歌 実材卿家集 源俊頼朝臣 俊頼ともに 日本紀 三世真人 ともに

又ことふるに市守長者もふるく人ぶりしとあり〔紅梅千句〕第廿二 追合

第　長者の家をつげるゆゑ

附　市もるう礎(イ)は柱の根ぶ　可頼

市もるう礎は柱の根ぶ　長元

俊頼朝臣集　延宝七年印本

初緑つけいちもと長者ふる　玖也

玉海集追加　寛文七

市守ハ緑つきて和長老年　童巴

俗諺玉手箱　延宝七年印本

下谷長者町といふ所あり　昔の長者や箱一つもつて出しと　守長者宅ゟ

拾芥抄　五ノ末　十五大寺條

興福寺　一守長者宅ゟ

日本世四巻　巻ニ

奈良の都より橋の諸兄とふ人食の時ふつの菓をそうしてせかそうめれが荘園も百町ばかりの広き福の里ゟ月ゟ広なの市ゟちりくるまでもとめ来ぬ人ハれを行ぎ施して市もとびう

敷とそ行つめ母親をやしなひそれが里人ハ

諸兄ハ市若ぶ十二の比育とありけれをも母のさうつ也づくわぶよ山老行の純ゟようて丹後の国司の娘吉詳姫とふぎよ夫婦のかさらひをはしいまの従形けんぞをあつめ橋井とふるとうよ　館をつくるもむしてよなひてふぶの死とありけれが時の帝此事をきこしめしてふぶな何ゟて橋の万取　長者と名をぞたまひける世の人くぶ市守長者とぞいひける又ちるをすゑたてまつる今日ぶの文殊といふ兄ぎりしこゝ以上ハ行基ぶ事をつものし全文ゟ日本紀ぶ廿四巻ハ行ぎ行ぶ仏の御本なれどまつくうぎ甚剋作りのぞしりの如うふ行ぶ又百余年のむし

ハ此文人ゟ市守ゟ和し記をゟりのきくふぶし

天和三年歳旦帳

橋や菓子の長者の如うに蓋　笑白

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

一盞老者屋鋪跡

老者屋敷ゟ水戸城の西郭袴塚村ニあり今ニ
出ず皆布目あり久字の分ニするもあり又ニ
海山ゟ出るなりけれど國史ニ五ツ穴あり古人の作
義家公陸奥ゟ歸て常陸を經ニ住の地ゟ
一日ニ駿馬ニて此を經ニ一ツ穴ニ
をなせ射ニ貫ニ所ニて裏ゟ表ニ
ニ出ざるけり急ニ手ニ
非河川ニ捨て沒ニ
（俗果）これハ常州の老者ニ
考原書ニも初人のかきそこなひニ

鯨幣

俳諧題林一句　天和三年印本　江戸住調和撰

汐吹や汗のごとく衣

鯨幣　遊水

とよめる句ハいかゞの名

天和前ゟ作り

掬ふ黄ハ汗をいとひ

麻の類を素

作る夏幣ニなごし

ちぶくるまで風ニ

延享二年の印本ニ鯨ニ

捧し　俳諧時雨傘ニ

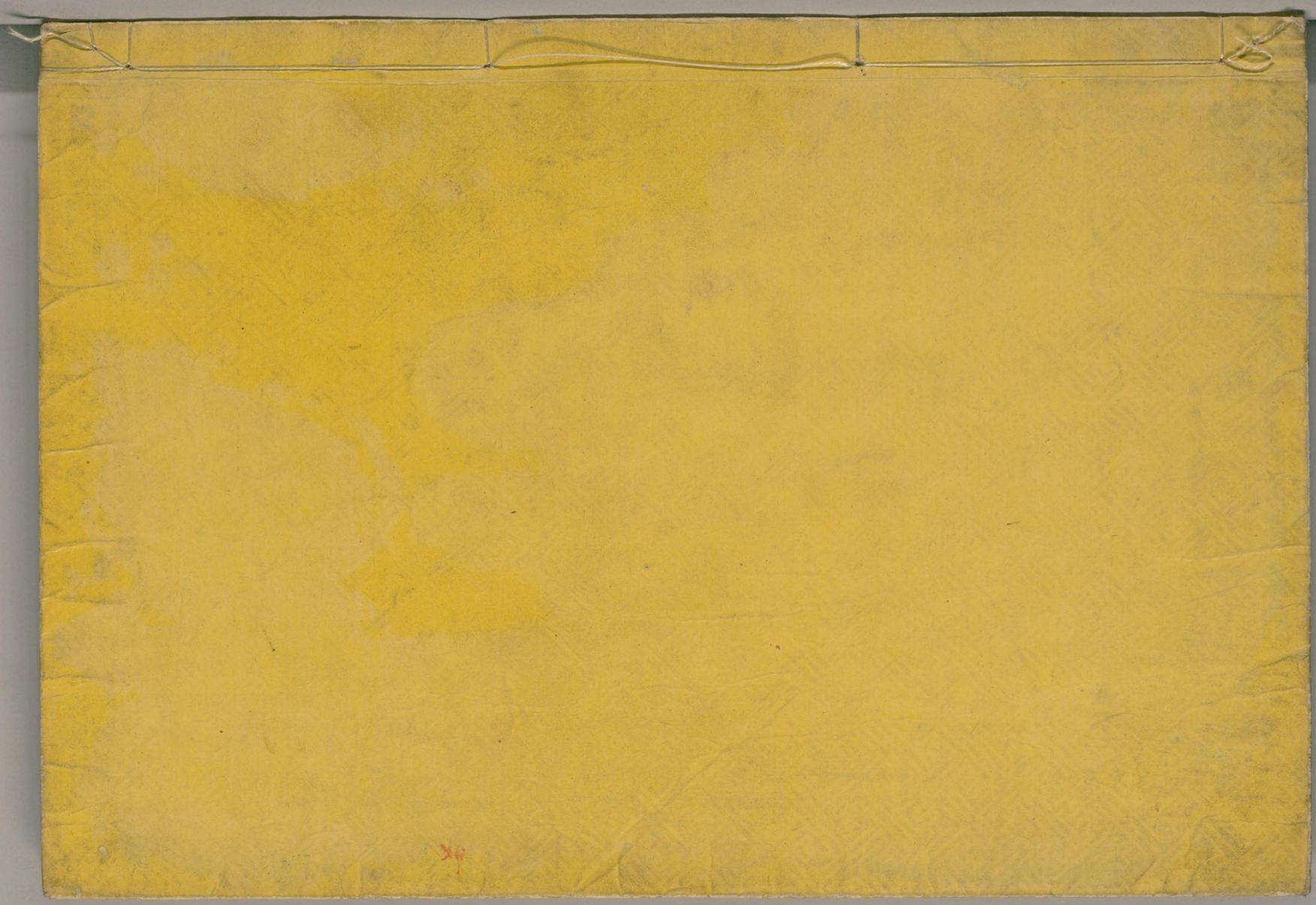
国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

859
3
83

5605

又そう是當時行はれて流行し物をあつめ
山吟行り又 延享甲子仲 紀逸が獨吟百仙
発句川 芳雨今ふくろう春
とう雪ふれば中昔癖ありて延享の頃より又ちと
あるそうな

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83

ガラス使用